

# サガマンダリン

登録番号：第638号

登録年月日：昭和59年9月5日

登録者：佐賀県(佐賀市内)1-1-59)

育成者：中牟田拓史 関道生

江原忠彰 野方俊秀

末次信行 松崎重雄

江口 浩 田久保美彦

中原美智男

来歴：「小西早生」と「フェアチャイルド」の交雑実生

## 特 性

### ■栽培特性

果樹の新品種の中で、本種ほど短期間に世に出た品種はない。交配が昭和51年、品種登録が59年、初出荷(70t)が63年。平成4年度の生産量は2,800tであった。

当初はトゲの発生がみられたが、現在では樹勢は落着き、トゲは発生しない。樹勢は早生温州なみかやや弱い。枝は、やや細く節間が短く、先端から基部近くの芽まで発芽し、副芽も発芽しやすいので、比較的密生する。葉は早生温州より小さい。葉身の長さは短い。幅は比較的広いので、丸味をおびる。葉先は細まり鋭い。葉柄は早生温州よりも長い。葉の厚さも早生温州より薄く、葉色も淡い。とくに、秋が訪ずれると葉色が褪せる。結実し始めると葉の小型化が進み、節間も短くなる。

### ■果実特性

単生花が主体であるが、しばしば総状花序を形成する。総状花序の腋花は開花も遅く、小玉で腰高果を生じる。単生の有葉花が大きくて品質のよい果実となるので、直花や腋花の果実は摘果する。子房や花弁は小さく、花器は貧弱である。やくは、温州ミカンの子孫に特徴的な退化を示し、花粉は全く生じない。単為結果性は強く無核果を産するが、花粉をもつ品種が隣接すると種子を生じるので、そのような品種を混植してはならない。

果実の大きさは、平均果重120gで、温州なみである。9月中旬より脱緑が始まり、11月上旬には完全着色し、特有の鮮やかな紅橙色を呈する。完着期を過ぎると陽光面の果皮は紅色が褪めることがある。

果皮は薄く、じょうのう膜も薄い。砂じょうは短大でズングリした形状を示す。そのため、果汁が少ないように見えるが、たっぷり豊富である。11月下旬に糖度は12~13度、酸は1.2~1.3%となる。収穫直後は、果実は堅くハリをもつが、10~15日間の予措により柔らかくなり、酸も減り風味は向上する。果皮色の増進には10~15℃下の予措がよい。果皮は薄くて弱いので、取扱いを丁寧にしなければならない。5℃以下の低温に遭遇すると油胞が黒ずむので注意を要する。

### ■病虫害抵抗性

病気では、かいよう病とそうか病が問題である。かいよう病に対し果実は「清見」なみの抵抗性をもつが、葉は弱いのでミカンハモグリガの加害に注意する。そうか病は温州ミカンなみの罹病性だから、同様な防除対策が必要である。灰色かび病に侵されると落花するので、高品質果となる初期開花の花を結実させるためには、その落弁期の防除が大切である。

### ■地域適応性

佐賀県下全域で栽培され、一応の成功をおさめているので、いわゆる温州ミカン産地は適地とみなしてよい。しかし、発芽や展葉は温州ミカンより2週間早くネーブルなみであるから、晩霜の害が懸念される地区は注意を要する。

糖の濃度は、温州ミカンに似て、砂質土壌よりも粘質土壌の方が高いようである。

(岩政正男)